



安楽寺本堂

に白幡神社に合祀されました。さらに、姫は、小船で宮久保の台地をまわりまされた。その後、台地の先端は美しい姫が通られたところから、「美女ヶ崎」と名付けられました。姫が着いたのは、入江の最も奥深い「浜道」に近いところでした。土地の百姓たちは、この辺りでは見かけない気品の高い姫と老女に、ただ者ではないと感じ、住まいを建て、食べ物を選んで手厚くもてなしました。やがて、このことが幕府に知られ、姫が天皇の皇女であることが分かれると、大切にもてなした農民に対して、幕府は年貢公役を免除し、皇女に仕えるよう命じました。それから、この地域が「奉免」と呼ばれるようになったというのです。

奉免とは、「年貢を免し奉る」ということとです。なぜこの地域の年貢が免除されたのか、それについては次のような伝説が残されています。

後深草天皇の皇女常盤井姫（ときわいひめ）が不治の病にかかり、乳母とともに都を離れて、はるばる関東に下ってきました。

当時の市川市域は、北部の台地の前面に、中山方面から江戸川に向けてつくられた砂洲のため、その中間の低地が「真間の入江」と呼ばれる奥深い入江になっていました。今でも、富貴島（八幡）・浜

道（柏井）・美女ヶ崎（宮久保）・天神沖（宮久保）・沖原（国分）などの地名（小字名）が、当時の名残りをとどめています。

姫は、小船で宮久保辺りまで来たときに、お守りとして護持していた天神様の像を台地の上に祀りました（この天神の祠は、大正三年

年貢公役が免除された地

ちようどそのころ、日蓮上人が富木常忍を頼って、若宮に來ていました。日蓮は、ここで百日間の説法をしたといひます。常盤井姫は若宮を訪れ、日蓮の説法を聞くとともに、自らの病を日蓮に話しました。日蓮は、早速、加治祈禱を行って姫の業病を治したといひます。姫は日蓮の所業に感じて弟子となり、日蓮から「日国」の法号を授けられました。そして、姫は奉免の地に庵を結び、法華経の功德を説いて住民の恩に報いました。これが、日蓮宗最初の尼寺である「安楽寺」の起りです。

日国は正応四年六月六日に世を去りますが、安楽寺では、皇室の紋章である十六弁の菊花紋が使われています。

◇（社会教育指導員・綿貫喜郎）

今回は「高石神」を予定していま

奉免